

〔松の落葉〕吉備國のみつにわかれし時代

おのれ○藤井がすめる此吉備國のかくくち中亥りとわかれしはいつのころなりけん、國史に亥るしもられたればさだかには亥りえがたし、日本書紀の仁德天皇の卷に於吉備中國川鳴河派有大虬令苦人といふこと見えたれど、こは神武天皇の御船の難波之崎にいたると亥るされたるごとく、縣守が虬をきりしところ、きびの國のみつにわかれたるのちにては、みちの中なるがゆゑに、さやうにかきたまへるにて、仁德天皇の御代に、みつにわかれてありし亥るしとは亥がたし、又同書の欽明天皇の卷に遣蘇我大臣稻目宿禰等於備前兒島郡置屯倉とあるもかみに同じ、さて同書の天武天皇の卷に吉備太宰石川王病之薨於吉備、又遣樟使主磐手於吉備國と見え、又吉備國守當摩廣島ともあれば、此ころまではわかれざりしこと亥りぬべし、續日本紀の元明天皇の卷に割備前國六郡置美作國とありて、和銅のころには、わかれてありし事さだかなければ、持統天皇の御代にわかれしならんと、おほよそには亥られつ、文武天皇の御代にてはあらじとさだめたるゆゑは、もしその御代にわかれたらんには、續日本紀に亥るさるべし、此紀はかかる事までも、もらさずか、れたる例なればなり、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命○中妹伊邪那美命○中如此言竟而御合○中然後還坐之時生吉備兒島

〔日本書紀一代〕一書曰、○中其素菱鳴尊斷蛇之劍、今在吉備神都許也、

〔日本書紀三神武〕乙卯年三月己未、徒入吉備國起行宮以居之、是曰高島宮、

〔古事記中孝靈〕大吉備津日子命與若建吉備津日子命二柱相副而於針間水河之前居、忌龕而針間爲道口以言向和吉備國也、故此大吉備津日子命者、臣之祖也。次若日子建吉備津日子命者、吉備下道○臣祖也。

〔日本書紀景行〕二十七年十二月、日本武尊○中從海路還倭到吉備以渡穴海、